

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



30

よろこびの知らせ
第30集

目 次

天に迎えられる道	1
ルカ 16:1-8	
地獄からの嘆願	10
ルカ 16:27-31	
主の家に住む	19
詩篇 23:1-6	
祈りの秘訣	28
ルカ 18:1-8	

ここに収められたメッセージは、2022年2~3月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

天に迎えられる道

ルカ 16:1-8

16:1 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。

16:2 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何とということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』

16:3 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしいし。

16:4 ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』

16:5 そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか。』と言うと、

16:6 その人は、『油百バテ。』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい。』と言った。

16:7 それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか。』と言うと、『小麦百コル。』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい。』と言った。

16:8 この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。

イエスは多くのことを「たとえ」を使って教えました。マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書には全部で39の「イエスのたとえ」が書かれています。マタイにはそのうちの20、マルコには9つあるのですが、ルカには27

もの「イエスのたとえ話」が書かれています。しかも、27のうち17は、マタイにもマルコにも載っていない、ルカだけのものです。きょうの「不正な管理人」（The Unjust Steward）というタイトルのたとえ話もルカの福音書だけにあるたとえです。

一、不正な管理人のたとえ

これは、どんなお話でしょうか。登場人物は、金持ちの主人と、その家の管理人、そして、金持ちの主人から油や麦などを借りていた人々です。大金持ちの家には、たいてい管理人がいて、その家の財産を守り、増やす責任を与えられていました。ところが、この管理人は、主人の財産を増やすどころか、乱費し、浪費していたのです。企業や官庁などで、経理担当者が会社のお金や官庁の予算を着服する事件が後を絶ちませんが、そういったことに似ています。けれども、この管理人の場合は、悪意があつて乱費していたわけではなかったようです。もしそうなら、主人にばれないように、うまくやったことでしょう。彼は、おそらく管理人に向かない性格で、何ごとにもおおざっぱで、節約すべきところで大盤振る舞いをしたり、人々の言うままにお金を払っていたのかもしれないかもしれません。ともかく、その事が主人の知るところとなりました。

彼は主人から、「おまえは何をしたのだ。きちんとした会計報告を出しなさい」と言い渡され、困り果てました。「きっと自分はクビになるに違いない。これからどうしようか。」こんな失敗をやらかしたので、も

う彼を雇ってくれるような他の人はいないでしょう。残っているのは、肉体労働か物乞いかのどちらかしかありません。しかし、彼は、そのどちらもしたくありませんでした。3節の最後の言葉、「土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしい」、これはじつに名文句です。

それで、この管理人は、土掘りも物乞いもしなくてよい方法を必死になって考えました。そして名案を思いつきました。彼は、主人から借りのある人たちをひとりひとり呼び出しました。油を借りている人に、「あなたは主人から油を何バレル借りているのかね」と聞きます。その人が「百バレルです」と言うと、借用証書を探しだして、「ここに百バレルとあるが、五十バレルに書き換えなさい」と言って、借用証書を書き換えさせました。また、小麦を百袋借りていた人には「八十袋にしなさい」と言って、人々の負債を軽くしてやったのです。

この管理人は、主人の財産を浪費したため辞めさせられようとしています。自分が浪費した分を少しでも埋め合わせようとするのが、普通なのに、彼は、さらに、不正なことをして、主人の財産を減らしています。なぜ、彼は、こんなとんでもないことをしたのでしょうか。主人を恨んで、仕返しをしてやろうと思ったのでしょうか。それとも、主人から借りのある人たちをかわいそうに思って、その人たちを助けてやろうとしたのでしょうか。どちらでもありません。彼は、自分がまだ管理人であるうちに、その立場を利用して、主人から借りのある

人たちに恩を売ろうとしたのです。恩を売った50人の家に、一週間づつ世話になっても一年は、食べるに困らないと考えたのでしょう。この管理人は、汗をかいて働くことも、恥ずかしい思いをして物乞いすることもなく、辞めさせられた後の生活の保証を得たのです。

さて、この管理人の主人ですが、この管理人が、不正を行った上に、借用証書まで勝手に書き換えたことを聞いて、どうしたのでしょうか。普通なら、カンカンになって怒り、彼を捕まえて牢屋にぶち込んだことでしょう。ところが、8節に「主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた」とあって、主人はこの管理人の利口さに感心してしまったというのです。主人が、彼をそのまま管理人として使い続けたとは思えませんが、おそらく、彼をクビにしないで、何か別の役割を彼に与えただろうと思います。

二、このたとえが教えるもの

このたとえ話は、管理人も管理人なら、主人も主人というわけで、とてもおもしろいのですが、結末が意外すぎて、この話を聞いて、いったいイエスは何を教えようとしておられるのか、分からなくなる人も多いと思います。「良いサマリヤ人のたとえ」には、誰もが心を探られますし、「放蕩息子のたとえ」を読んで心を動かされない人はいないでしょう。しかし、この「不正な管理人のたとえ」を読んでも、そのような感動は伝わってきませんし、「こんな正しくないことが喜ばれていいのだろうか」という疑問が残ります。いったいイエスは何を

おっしゃりたいのでしょうか。私たちはこのたとえから何を学ぶべきなのでしょう。

イエスはこのたとえで、世の中の現実を描いていますが、それを容認しているわけではありません。8節でイエスは「この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがない」と言っておられます。「この世の子ら」というのは、神を信じない人々のことで、「光の子ら」というのは、神を信じ、イエス・キリストを信じる人々のことです。不正な管理人がしたことは「この世の子ら」の間では通用しても、「光の子たち」の間では、決してまかり通ってはならないものなのです。イエスは、このようなでたらめな管理人をたとえに使うことによって、神を信じる者たちに、そのようであってはいけない、「光の子」は「この世の子」とは違う原理で生きるのだということを教えようとされたのです。

「光の子」の生き方、その原理は「忠実」です。「タラントのたとえ」（マタイ 25:14-30）では、主人が、あるしもべには5タラント、別のしもべには2タラントというお金を預けたことが書かれています。このしもべたちは、それぞれ、主人の留守中にもう5タラントやもう2タラントを儲けました。そのとき主人はしもべたちに言いました。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさん物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」

（マタイ 25:21、23）イエスは、私たちに、どんなことに

おいても「忠実」であるようにと教えておられます。

では、「忠実である」とは、どうすることなのでしょう。イエスはこう言われました。「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」(9) ここで「不正の富」と言われているのは、悪いことをして儲けたお金のことではありません。10-12節には「不正の富」と「まことの富」、「小さい事」と「大きい事」、「他人のもの」と「自分のもの」という比較があります。これはみな、地上のことがらと天の報いのことを指しています。私たちは皆、神から、時間、財産、才能、健康、人間関係などを忠実に管理するようと任せられているのです。地上では私たちはそうしたものの管理人にすぎません。まことの所有者は神です。しかし、私たちが、それらのものに忠実であるなら、天では、自分が忠実であったすべてのものを自分のものとして受け継ぐのです。いや、その何倍も、また地上のものに勝るものを受けるということを、イエスはここで教えておられるのです。

9節でイエスは、「永遠の住まい」と言っておられます。これは天のことです。この地上は「永遠の住まい」ではありません。誰にも、やがて、この世を去り、この地から離れる日がやってきます。不正な管理人が「会計報告を出せ」と迫られたように、私たちも、人生の終わりに、自分の人生の総決算報告をしなければなりません。

ん。そのとき、私たちは大丈夫でしょうか。おそらく、誰も大丈夫ではないでしょう。私たちは、神から与えられた人生の日々を多く浪費し、乱費してきたのです。この管理人が、「土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしい」と言って、自分の力では、自分の将来について何もできなかつたように、私たちは、誰ひとり、自分の力では永遠の幸いを保証することなどできないのです。

では、どうすれば良いのでしょうか。自分以外の誰かに頼るしかないのです。たとえ話の管理人が人々に恩を売って、仕事をやめさせられたあと自分を迎えてくれる「友」を作ろうとしました。イエスは、私たちにも、「不正の富で、自分のために友をつくりなさい」と言われました。これは、「地上に生きる間に、自分を天に迎えてくれる友を見出しておきなさい」ということなのです。けれども、その「友」とは誰なのでしょう。

聖書は、「罪から来る報酬は死です」（ローマ 6:23）、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル 9:27）と教えています。天にはあらゆる幸いがありますが、ただ一つ無いもの、いや、あつてはならないものがあります。それは罪です。私たちは罪があるままでは天に入ることができません。私たちを天に迎えてくれる「友」は私たちの罪を赦し、私たちを罪からきよめてくださるお方でなければなりません。

もう、お分かりですね。そのお方はイエス・キリスト

です。イエスは言われました。「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」（ヨハネ 14:2-3）イエスが私たちが永遠の住まいに迎え入れてくださる、私たちの「友」です。私たちは自分のどんな努力によっても、天に場所を買うことはできません。そこは、人間の力の及ばないところでは、イエスを信じ、イエスに頼り、自分の永遠の日々をイエスお任せする以外に永遠に備える道はないのです。この世で、誠実に、忠実に生きる第一のことは、イエス・キリストを信じることなのです。

神を信じない多くの人は、永遠のことや、天の幸いを考えることをしないで、「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか」（コリント第一 15:32）というような、何の目当てもない生活を送っています。けれどもやはり明日のことを考え、将来に備えます。そうであるなら、神を信じるものは、ソそれ以上に永遠に備える必要があります。永遠を望み、天を仰ぐことによって、私たちは、意味のある確かな人生を送ることができるからです。そして、そのような生活は決して無駄にはなりません。それは地上においても、大きな幸いを与えてくれます。もし、地上で報われることがなかったとしても、天では、必ず報われるからです。私たち皆がイエスに

よって天に迎えられ、主から報いをいただけるように、主を信じ、主に忠実な者でありたいと願っています。

(祈り)

私たちの造り主なる神さま、あなたは私たちの心に永遠を思う思いを与えてくださいましたが、私たちはしばしばそのことを忘れ、日々をただ忙しく過ごすだけで終わってしまうことがなんと多いことでしょうか。きょう、こうして、仕事から解放され、天を仰ぎ見る時が与えられました。日々に永遠を思い、また、地上の事柄に忠実であることができますよう、私たちを助け導いてください。主イエスのお名前です。

地獄からの嘆願

ルカ 16:27-31

16:27 彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。』

16:28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』

16:29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』

16:30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』

16:31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』』

「先生、地獄について話してください」というリクエストをいただきました。聖書は、天国のことを教え、天国に行く道を示す書物ですから、地獄のことについては多くを語っていません。ですから、そのリクエストに答えるのはとても難しいのですが、まずは、基本的なことを学んでおきたいと思います。

一、仏教の「地獄」

まず、「地獄」という言葉ですが、これは、もともとは仏教の言葉です。それで、まず、地獄についての仏教の教えから話しを始めましょう。仏教で地獄のことをいちばん詳しく語っているのは『往生要集』という985年頃の書物です。それによると、人は死んだあと、6つの世界のどこかへ行きます。これを「六道」と言い、良い方か

ら言うと、「天上」、「人間」、「修羅」、「畜生」、「餓鬼」、「地獄」があります。「修羅」から「地獄」まではすべて苦しみの場所で、中でも「地獄」はいちばん大きな苦しみを受けるところです。

人は死ぬと、7日後に不動明王の裁きを受け、それから7日おきに、釈迦、文殊菩薩、普賢菩薩、そして閻魔大王の審判を受けます。皆さんも「嘘をついたら閻魔様に舌を抜かれる」ということを聞いたと思います。それからさらに弥勒菩薩の裁きがあり、死後49日目には、薬師如来が、最終的に人を「六道」のいずれかに振り分けまします。日本では、人が亡くなってから7日目に「初七日」、また49日目に「四十九日」の法要を営みますが、それは、亡くなった人の行き先が決まるまでの間、地上にいる者が供養をすると、死者が地獄を免れると信じられているからです。

しかし、仏教には五つの戒めがあり、このうちのどれか一つでも破れば、地獄に落ちます。第一の戒め「不殺生」（生き物を殺さない）の中には虫を殺すことや、肉を食べることも含まれますから、世界中のほとんどの人が地獄に落ちることになります。第二の戒めは「不妄言」（嘘をつかない）、第三は「不倫盗」（盗みをしない）、第四は「不邪淫」（享楽に溺れない）、第五は「不飲酒」（酒を飲まない）です。

地獄はさらに8つに別れており、叫喚地獄や阿鼻地獄などがあり、そこでは「五戒」を犯した者が刑罰に苦しみ泣き叫ぶのです。「阿鼻叫喚」という四文字熟語はここ

から生まれました。

私は子どものころ神社の境内で、説法師が地獄絵巻を人々に見せながら地獄の話をするのを聞いてとても怖くなったのを覚えています。仏教が教えるものは、人間の想像から生まれたものに過ぎないので、「死後の世界など無い」という人もありますが、そうした人であっても、心の奥底では「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」（ヘブル 9:27）ことを知っています。神は世界中の誰にも、死後の裁きを示してこられたのです。

二、聖書の「ゲヘナ」

聖書では、死者の世界はヘブライ語で「シェオール」、ギリシャ語で「ハデス」と呼ばれ、「陰府」（よみ）と訳されています。そして、この陰府には二つの場所があります。「ラザロと金持ち」のたとえでは、ラザロが行った場所と金持ちが行った場所とは、同じ死後の世界でも全く違っていました。ふたりの行った先は、ふたりの生前の生活とは真逆でした。

ラザロは「全身おできの貧乏人」（20節）でした。貧しくても健康なら、働いて糧を得ることができるのですが、病気の彼は、からだを動かすこともままならず、金持ちの家の前に寝かされていました。「金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた」のですが、そのこともかないませんでした。金持ちも、金持ちの客もあり余るほど食べていたのに、ラザロに分け与えてやる人は誰もいませんでした。彼のところに来たのは犬だ

けでした。犬は文字通り「食卓から落ちる物」を食べることができましたが、ラザロは何一つ得ることができませんでした。ラザロは犬以下の扱いを受けていたのです。しかし、それだけに、彼は神を信じ、神に頼り、神に望みをかけました。

ラザロは死んでからも、おそらく誰にも葬ってもらえなかったでしょう。しかし、天使がラザロたましいを「アブラハムの懐」に連れていってくれました（22節）。「アブラハムの懐」というのは、聖書が別のところで「パラダイス」と呼んでいるところと同じです。そこは、死者の世界とは言っても、同時に天の一部であり、もはや死の陰の暗さはなく、光と命と平安と慰めに満ちた場所、天使たちがいる世界でもあるのです。ラザロはその信仰ゆえに、このような幸いな場所に導かれたのです。

やがて金持ちも死にました。貧しい人も大金持ちも同じように死にます。死は誰にも平等にやってきます。金持ちの葬式は盛大なものだったでしょう。しかし、どんなに盛大な葬式も、彼の死後の運命を変えることはできませんでした。金持ちは生前、「いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らして」いました（19節）。この「遊び暮らす」と訳されているところには「食べて楽しむ」という言葉が使われています。ルカ12章の「愚かな金持ち」が「さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ」と言ったのと同じです。この金持ちも、あの「愚かな金持ち」と同じように自分の財産により頼

み、神を忘れていたのです。

彼のたましいが行ったのは、死者の世界の中でも、「パラダイス」とは隔離された別の場所でした。そこは聖書で「ゲヘナ」と呼ばれている場所で、以前は「地獄」と訳されていました。イエスはそこでは火が消えることがないと言われました（マタイ 5:22、18:9、マルコ 9:43、9:48）。黙示録はゲヘナを「火の池」と呼んでいます（黙示録 19:20、20:14-15）。金持ちは「私はこの炎の中で、苦しくてたまりません」（24節）と言っていますから、彼が「ゲヘナ」にいたことが分かります。

ラザロと金持ちのたとえは、確かにたとえなのですが、かといって、死者の世界や「パラダイス」、また「ゲヘナ」までがたんなるお話であるというわけではありません。イエスが話されたたとえはどれも現実に基づいたものです。もしこれがたんなる物語なら、「貧乏人と金持ち」とだけ言えばよいのですが、イエスは、この貧しい人を「ラザロ」という名で呼んでおられます。聖書学者の多くは、ラザロが実在の人物であったと認めています。カトリック教会ではラザロは「聖ラザロ」と呼ばれ、貧しい人々の「守護聖人」になっているほどです。

イエスは、死者の世界や「ハデス」も「ゲヘナ」も、それを現実のものとして教えておられます。今は救いの時代ですが、この恵みの時代が終わって、イエスが世界を裁かれるときが来ます。そのとき、イエスは、正しい者には「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初

めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい」(マタイ 25:34)と言われます。けれども正しくない人たちには、「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ」(マタイ 25:41)と宣告されます。これは、とても厳かな言葉です。天国やパラダイスが実在するものであるように、「ハデス」や「ゲヘナ」もまた実在するものです。私たちがこのことを本気で信じるなら、本気で救われたい、天に迎え入れられたいと願うようになるでしょう。

三、天への道

さて、金持ちは「ゲヘナ」からパラダイスを仰ぎ見て、アブラハムに「ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください」(24節)と願いました。しかし、この願いがかなえられないことを知ると、今度は、「ではお願いです。ラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみのある場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください」(27-28節)と願いました。自分が苦しむのはしかたがないとしても、せめても、自分の肉親が同じ苦しみに遭うことがないようにと願ったのです。アブラハムはこれに対して「彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです」と答えました。それでも彼は、「もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません」(30節)と食い下がりました。こ

れは、神だけでなく、死者のたましいもまた、私たちに悔い改めて神を信じ、天への道を歩むよう願っていることを教えています。

このアブラハムの金持ちへの言葉はそのまま、イエスの教えをあざけり、イエスを信じようとしなかった人々への言葉でした。彼らは「奇蹟を見たら信じてやろう」と、イエスに奇蹟を求めました。しかし、イエスが奇蹟をなさっても、信じませんでした。死人が生き返るといえるのは、奇蹟の中の奇蹟です。イエスは、何人かの亡くなった人を生き返らせ、最後には、ベタニヤの、マルタとマリヤの兄弟を生き返らせました。死んで四日も経っているのに、その人を墓から呼び戻し、生き返らせたのです。しかも彼の名前も「ラザロ」でした（ヨハネ 11 章）。では、ベタニアのラザロが生き返ったのを見たユダヤの人々は、悔い改めて、イエスを信じたのでしょうか。いいえ、それどころか、ますますイエスを亡き者にしよう企んだのです（ヨハネ 11:53）。彼らは、イエスの言葉に聞かなかつたばかりか、「もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行つてやったら、彼らは悔い改めるに違いありません」という「ゲヘナ」からの叫びの声にも聞かなかつたのです。

そして、彼らは実際にイエスを十字架につけて殺してしまいました。しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださいました。そして、よみがえられたイエスは弟子たちを通して、救いの福音を全世界に証ししてくださいました。ルカ 24:46-47 で、イエスが「キリス

トは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」と言われた通りです。誰かがよみがえって悔い改めが起こる。これは、金持ちが「もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません」と言ったのと同じです。金持ちの「ゲヘナ」からの嘆願は、ある意味では聞き届けられ、よみがえられたイエスによって実現したのです。

イエスは「ハデス」に打ち勝ち、天に私たちの場所を用意し、天への道となってくださいました。このことを理解できなかったトマスは「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう」と言いました。それに対してイエスは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」と答えられました（ヨハネ 14:5-6）。これは、逆に言えば、「イエスという道を通って行けば、だれもが神のもとに、天に行くことができる」ということです。イエスが天への道です。私たちが「ゲヘナ」への道から回れ右をして歩むことのできるただ一つの道です。

死後の世界について、それを否定する人もあれば、好き勝手なことを言う人もあります。しかし、それらはみな人の心に思い浮かぶ想像から出たものにすぎません。ただ一人、死者の世界から帰って来られたイエス以外

に、誰も死後のことを正しく語る事ができる人はありません。天から来られ、天に帰られたイエスの他、誰も天を教え、そこに導くことができる者はいないのです。死んでよみがえられた方、イエス・キリストの言葉以上に正確な言葉はありません。このイエスの言葉に聞き、イエスを信じる事、それが私たちに「ハデス」に打ち勝たせ、「ゲヘナ」への道から引き返えさせ、天への道を歩ませてくれるのです。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、よみがえられたイエスによって、死後の世界をあきらかにし、永遠のいのちへの道を開いてくださいました。そして、救いの福音は今、全世界で宣べ伝えられています。ひとりでも多くの方が、この福音を聞いて、信じ、天への道を歩みはじめることができますよう、助け、導いてください。主イエスのお名前です。

主の家に住む

詩篇 23:1-6

23:1 【ダビデの賛歌】主は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。

23:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

23:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。

23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。

23:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましよう。

詩篇 23 篇の 4 節までは、主が羊飼いです、主を信じ、主に従う者たちが羊にたとえられています。しかし、最後の 2 節は、主が客人を迎える主人として描かれ、主を信じ、主に従う者たちがその賓客、大切なゲストであると言われている。主は、私たちをどんなふうにもその家に迎えてくださるのでしょうか。きょうは、そのことを学びます。

一、祝宴への招待

最初に 5 節ですが、「あなたは私のために食事をととのえ」とあって、主が私たちを祝宴に招いておられることが言われています。この「祝宴」は、神の国や、神の国

に迎え入れらる救いの喜びを表しています。イエスの弟子となったレビやザアカイはイエスを招いて祝宴を開きました。けれども、靈的な観点で見るなら、レビやザアカイがイエスを招いたのではなく、イエスがレビやザアカイたち、また、悔い改めて神に立ち返った人々を天の祝宴に招いておられたのです。祝宴の主人はイエスであり、イエスをご自分のところに返ってくる人々を、その身分や立場、過去がどうであったかはまったく問うことなく、大切な客人として迎えてくださるのです。

「あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます」というのは、大切なお客様を迎えるとき、その人の頭に香油を注いで歓迎したという当時の慣わしに基づいた言葉です。今もそうですが、当時、香油はもっと高価なものでした。それを客人に惜しみなく注いでくださるというのは、主がどんなにか私たちを歓迎してくださっているかを表しているのです。この香油は主の祝福を表します。主は、私たちに地上の祝福だけでなく、天の祝福を惜しみなく注いでくださるのです。

「私の杯は、あふれています」というのは、主が与えてくださる喜びがどんなに大きいかを表しています。この世が与える喜びは、いうならば、大きな杯の中に落とされたほんのひとしずくにすぎません。すこしは心の渇きを和らげてくれますが、すぐにまた渇いてしまうのです。しかし、主が注いでくださる喜びは、私たちのたましいを満たしてあふれるほどのものです。それは、私た

ちのたましいに注ぎつづけられて途絶えることはありません。じつに、「主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」（詩篇 118:1 口語訳）のです。

しかも、この喜びの祝宴は、「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ」とあるように、「敵の前で」開かれるのです。主が開いてくださる祝宴は、勝利を先取りした祝宴です。私たちの人生には、必ず困難や妨げがあります。がっかりすることや、「ムッ」となること、また「イライラ」することは、数限りなくあります。もし、私たちがそのたびごとに、そうした「敵」に負けていたら、主からいただく喜びを失っているなら、主が悲しまれるでしょう。

詩篇 116 篇は苦しみと悲しみの中で歌われました。こう言っています。「死の綱が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、私は苦しみと悲しみの中にあつた。」（詩篇 116:2）けれども、この人は祈りました。「主よ。どうか私のいのちを助け出してください。」（同 3 節）すると、主はこの人を救ってくださいました。この人は、「まことに、あなたは私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、救い出されました」と言い（同 8 節）、「私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう」（同 13 節）と言って、主を賛美しています。主は、このように、さまざまな困難や課題の中でも、私たちに救いの喜びを与えてくださるのです。

主は私たちを、この祝宴に招いてくださっています。

主は、いつも、私たちが歓迎してくださいます。私たちもその招きに応えましょう。そのとき私たちも「私の杯は、あふれています」と言うことができるようになるのです。

二、生きる日の限り

6節は、こう言っています。「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来ましょう。」「いのちの日の限り」というのは、生涯を通してということです。じつに主は、私たちの生涯の初めから終わりまで共にいてくださいます。

詩篇 139 篇には「私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに」（詩篇 139:15-16）とあります。主は私たちの誕生以前から、母の胎にいたときから、共にいてくださったことが書かれています。

スイスの精神科医パウル・トゥルニエが書いた『人生の四季』では、20歳までが人生の春、40歳までが人生の夏、その後は人生の秋といったふうに区分されています。トゥルニエによれば60歳からは冬の季節に入ります。確かに、この年齢になると、冬に落葉樹がその葉をすべて落としてしまうように、今までしてきた仕事や活動から徐々に手を引くようになります。若い時には出来たスポーツや趣味などが出来なくなります。友人たちが

世を去り、人間関係が変化していきます。冷たい風が木の枝を揺さぶり、枝が氷つくようなこともあるでしょう。年老いてからの試練はとてつらいものです。しかし、そのような時も、私たちの羊飼いいイエス・キリストは私たちを支えてくださいます。イザヤ 46:4 は、こう言っています。「あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」羊飼いが羊を肩にのせて運ぶように、主は、いつでも、私たちを背負って、救い出してください。

それは、何も私たちが年老いてからとはかぎりません。「若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れ」ます（イザヤ 40:30）。主は、そんな時も、いや、そんな時こそ私たちを支えてくださるのです。Margaret F. Powers は、“Footsteps”（あしあと）というタイトルのこんな詩を書きました。

ある夜ある人が夢を見た
夢の中で主と共に海辺を歩いていた
そこには、彼の人生の光景が写し出されていた
どの人生の光景にも砂の上には二組の足跡があった
彼の足跡と主の足跡

最後の光景が写しだされ
その足跡を見ると
あるところはただ一組だけの足跡しかなかった
それは人生の最も暗く悲しい時だった

彼は主に尋ねた

「私があなただに従い始めた時
あなたは私と共に歩んでくださると言ったではありませんか
でも私が最も困難な時には一組の足跡しかありません
主よあなたを最も必要としていた時
なぜあなたは私から去っていかれたのですか」

すると主は答えられた

「わが子よ いとしい子よ
私がどうしておまえを忘れることがあろうか
あなたの試練の時苦しみの日に
一組の足跡しか見なかったのは
私があなただを背負って歩いていたからだのだ」

この詩のように、主は私たちの人生の初めから終わりまで、喜びの日も涙の夜も、順境の日々も逆境の日々も、いつも共にいてくださり、私たちの生涯を支え、守り、満たしてくださるのです。

三、永遠までも

では、地上の生涯が終わるとき、私たちはどうなるのでしょうか。6節は「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう」と言っています。この「あとを追う」という言葉は、犬などがどんなに追い払ってもしつこく人のあとをつけ回すようなときに使う言葉です。普通は人が神の「いつくしみと恵み」を追い求めるものです。ところが、ここでは神の「いつくしみと恵み」のほう人が人を追い求めると言われています。神の「いつくしみと恵み」を追い払うよ

うな人はいないでしょうが、もし、それを追い払おうとしても、そこから逃げ出そうとしても、それらは、私たちを追いかけ、私たちから離れないというのです。こんな恵みは、聖書以外、どこにも教えられていません。こんな恵みをくださるのはただ主おひとりです。

しかも、ここでの「恵み」はヘブライ語で「ヘセド」という言葉が使われています。これは「契約の愛」とも呼ばれ、神が堅い約束、契約をもって私たちに誓ってくださった恵みや愛を指します。英語では “steadfast love” と訳されます。人間の愛のように時間が経てば冷めていき、場所が離れればうすらいでいき、その日そのときの気分で変わるようなものではありません。どんなことがあっても変わる事のない永遠の愛を指します。ある牧師の説教に「神はあなたに夢中です」というタイトルがつけられていました。神が私たちが慕い求めるほどに愛してくださり、今も愛しておられ、永遠までも愛してくださるといのは、ほんとうのことです。エレミヤ 31:3 で、主は「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに真実の愛を尽くし続けた」と言っておられます。

主の愛は永遠の愛です。ですから、それが私たちの 80 年や 90 年の地上の生涯だけで終わるはずがありません。私たちが今体験している神のいつくしみと恵みは、私たちの地上の生涯を超えて続くのです。いや、天では地上のどんな制限も受けませんから、天ではその恵みを最大限に味わうことができるのです。

詩篇 23 篇は「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」という言葉で終わっています。「主の家」とは旧約では神殿を指す言葉ですが、ここでは天の神殿のことです。今、私たちは、地上で、礼拝という「天の窓」を通して、天を覗きみしていますが、やがての時、私たちは天に迎え入れられ、そのすべてを見ることになります。天の神殿で、白い衣を来て、しゅろの葉を持って、御座におられる主を礼拝するのです。

また、「主の家」には、「神の民」、「神の家族」という意味もあります。私たちが世を去って行くところは、見知らぬところではありません。そこは私たちの信じるイエスがおられるところ、主を信じる人々のいるところ、私たちの天の家族がいるところです。そこは私たちのふるさとです。私たちはみな、イエスを信じて天で生まれた者たちです。イエスは天の住まいを「マンション」と呼びましたが、私たちはみな、天では同じ「主の家」という大マンションの住人になるのです。同じ故郷を持ち、やがて共に住む者たちが今、ここで出会い、共に天への旅を励まし合う。それがキリスト者の交わりです。

「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」生きる日々も、世を去るときも、世を去ってから、主が共にいてくださる。この恵みのうちに、日々を歩むことができる。この幸いを心から感謝します。

(祈り)

私たちの主なる神さま、羊飼いである主イエスが私たちの人生の四季に共にいてくださることを感謝します。だれしも冬の季節を迎えるようになりますが、冬の次は春です。私たちは天で永遠の春を喜び楽しみます。主よ、私たちにこの希望を豊かに与え、主イエスが十字架と復活によって切り開いてくださった天への道を歩み続ける私たちとしてください。そして、この天への旅に、さらに多くの人々を加えてください。主イエスのお名前です。

祈りの秘訣

ルカ 18:1-8

18:1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。

18:2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。

18:3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』と書いていた。

18:4 彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、

18:5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』と言った。」

18:6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。

18:7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけなくて、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょう。

18:8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

一、失望しないで（1節）

「不正な裁判官とやもめ」のたとえでイエスが教えようとなされたことは、1節に要約されています。「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された」とあります。イエスは私たちに「失望しない」とことと「祈り続ける」

ことを学びなさいと言われるのです。ところが、私たちはしばしば失望します。そして祈るのをやめてしまいます。失望は信仰の「敵」です。これに勝つことができたなら、私たちはもっと力ある祈りができるようになると思います。

バンヤンが書いた “The Pilgrim's Progress”（天路歷程）は、主人公が「滅亡の町」からさまざまな困難をへて天の都に向かっていくストーリーです。そこには「俗念の市」、「困難の丘」、「死の影の谷」、「虚栄の市」、「疑惑の城」などが登場しますが、「落胆の泥沼」というものもあります。いったん落胆の泥沼にはまるとそこからはい出ることができなくなります。小さな失望が重なって大きな絶望とならないうちに、落胆が失望にならないうちに、そこに沈みこんでしまわないうちに、この泥沼から這い上がらなければなりません。『天路歷程』の主人公が天の都に到達するときのパートナーは、“Mr. Hope”（希望）でした。信仰の旅では「希望」という道連れが、私たちにも必要です。

ダンテの『神曲』によると地獄の門には「汝等ここに入るもの一切の望みを棄てよ」と刻まれています。ダンテが言うように地獄には希望が一切ありません。この世にあっても、そこがどんなに物質的に豊かで、楽しみがいっぱいのところでも、そこになんの希望もなければ、そこは地獄のような場所になってしまいます。逆に、そこがどんなに苦しいところであっても、そこに希望があれば、そこは天国のようにいつも光が見え、喜びのある

ところになります。

創世記にあるように、ヨセフは兄たちにねたまれエジプトに奴隷として売られました。しかし、ヨセフは失望しませんでした。彼は、ファラオに仕える役人の家で、その管理人として才能を発揮しました。ところが主人の妻の誘惑を斥けたために、主人の妻から濡れ衣を着せられ、無実の罪で牢に入れられてしまいました。エジプトで人生を切り開こうとしていた矢先のことでしたから、失望、落胆し、自暴自棄になっても不思議ではありませんでした。しかし、ヨセフは牢獄でも希望を捨てませんでした。

ヨセフがいた牢獄にファラオに仕える献酌官が入ってきました。王の怒りを買って牢に入れられたのですが、ヨセフは彼に、「もうしばらくしたら、王の怒りがとけて、元の地位に戻ることができきる」と話してあげました。そして、そうなったときは「私が牢から出られるようとりはからってほしい」と頼みました。ところがこの献酌官は、自分が救われたうれしさのあまりヨセフのことをすっかり忘れてしまったのです。献酌官から何の音沙汰もないうちに二年が過ぎてしまいました。しかし、ヨセフはそれでもあきらめませんでした。神のなさることには「時」があると信じ、その「時」を待ったのです。そして、その時がやってきて、ヨセフはエジプトのファラオに次ぐ地位に就くことになりました。

聖書は教えています。「善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ること

になります。」（ガラテヤ 6:9）ヨセフは希望を持ち続け、神の時を忍耐して待ち望んだので、その報いを得たのです。私たちも「失望しないで祈り続ける」なら、必ずその答えをいただく時が来ます。失望しないで祈り続けてきた人はみな、そのような体験を持っています。

二、祈り続ける（2-3 節）

さて、きょうのたとえの主人公は「やもめ」です。旧約でも新約でも、「やもめ」は弱い人々を代表しています。旧約の律法には「在留異国人や、みなしごの権利を侵してはならない。やもめの着物を質に取ってはならない」（申命記 24:17）とあります。かつてのイスラエルでは収穫をする時には、畑の隅々まできれいに刈り取ってはならず、刈り残したものはやもめたちのものとしなければなりませんでした。ルツ記にはそうしたことが実際にあったことが記されています。新約時代にも教会には「やもめの名簿」（テモテ第一 5:9）というものがあって、教会は親族のない年老いたやもめたちを助けていました。ヤコブ 1:27 には、「父なる神の御前できよく汚れない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることで」と教えられています。

この箇所はやもめは、やもめであることだけでも大変なことだったのですが、その上、争いごとに巻き込まれていました。それがどんなことだったかは何も書かれていませんが、彼女は弱い立場につけこまれ、権利が侵されようとしていました。それで彼女は町の裁判官に訴え

たのです。

ところが、彼女の町の裁判官は「神を恐れず、人を人とも思わない」人物でした。有力者からわいろをもらい、その人たちの有利になるような裁判をしていました。4節に「彼は、しばらくは取り合わないでいた」とあるように、やもめの訴訟をほったらかしにしていました。やもめが訴え出ているようなことを裁いてやっても一銭の得にもならないと考えたのでしょう。イスラエルの法律は公平で、弱い立場にある人々に温かいものでした。しかし、どんなに法律が公平でも、それを運用する人が正しくなければ、法律は曲げられてしまいます。このやもめは、不運にも、とんでもない裁判官に出くわしたのです。

しかし、彼女は、失望しませんでした。彼女には、頼るべきコネもツテもありませんでした。理路整然と自分の状況を説明し町の人々を味方につけることもできませんでした。彼女にできることは、裁判官のところに足を運んでは嘆願することだけでした。おそらく毎日、朝に、昼に、晩に裁判官のところにやってきては、「私の相手をさばいて、私を守ってください」と訴えていたことでしょう。他の人は、「あんな裁判官に頼んでも何にもならないよ」と言ったでしょうが、彼女はひたすらに嘆願し続けました。それが彼女に残されたたったひとつの方法だったからです。

神は、多くの場合、祈るとすぐに、それに答えてくださいます。けれども、ときには、いくら祈っても解決が

与えられないことがあります。それは、神が祈るしか方法がないというところに私たちを追いやって、神への信頼を新たにさせるための訓練である場合が多いのです。ですから、神のみこころを信じて、失望しないで、「祈り続け」ましょう。

三、失望しないで祈り続ける理由（4-8 節）

やもめのひっきりなしの嘆願に、この裁判官はついに、「この女のために裁判をしてやることにしよう」と心を決めました。それは、彼に裁判官としての良心がよみがえったからでも、やもめを気の毒に思ったからでもありません。このやもめが、「ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない」（5 節）という理由からでした。ここで滑稽なのは、この不正な裁判官が自分で自分のことを「神を恐れず、人を人と思わない」と言っていることです。彼は自他ともに認める、折り紙付きの「不正な裁判官」で、むしろ、それを売り物にしていたほどの人だったのです。そんな裁判官であっても、ほとほとまいってしまうほどに、やもめは熱心に、真剣に、あきらめないうで嘆願し続け、それが裁判官を動かしたのです。

イエスはこう話されてから、「まして神は…」とおっしゃいました。不正な裁判官でさえ、熱心に願えば、たとえ、「うるさいから」という理由であったとしても態度を変えたとしたら、私たちに対してあわれみ深く、公平で、正しく、すべてのことを働かせて善に変える力のある神が、私たちの願いを聞いてくださらないわけがあ

ろうかと、言われたのです。

イエスは同じことをマタイ 7:9-11 でこう言われました。「あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありますでしょう。」

ここに「あなたがたは、悪い者ではあっても」とあるのは、罪のために自己中心になってしまっている人間の内面の姿についての言葉です。どんなに善良で犠牲的な人にも、その中に、さまざまな形での自己中心性があるものです。そんな私たちではあっても、自分の子どものためには犠牲を払い、良いものを与えようとしみます。人間は墮落したとはいえ、神の恵みによって何らかの善を保っているのです。もしそうなら、完全な善である神が、神の子どもたちの求めに答えてくださらないわけがないのです。神は、私たちの祈りを「うるさくてしかたがないから」というので不承不承聞き入れるのではありません。私たちの神は、「さあ、わたしに願いなさい。どんなにうるさく願ってもいいのだよ」と、私たちが本心から祈り求めるのを待っていてくださるお方です。この神の愛があるかぎり、私たちに失望はないのです。

イエスはマタイの福音書で不完全な人間の親と完全な

たましいの親である神とを比較しましたが、ここでは、不正な裁判官と天の裁き主である神とを比較しています。不正な裁判官を登場させるのによって、私たちの神がどんなに正しく、真実なお方であるかを教えようとされたのです。皆さんは不誠実な人に出会って、ひどい目にあわされたことがありますか。なぜ、あんな人と出会ったのだろう。もっと善い人と出会っていれば…と悔しく思った経験があることでしょう。しかし、不誠実な人に出会うことも、全く役に立たないわけではありません。それによって、逆に、神がどんなに真実なお方であるかを確信することもあるのです。神は、あのような人とは違う、その正反対に素晴らしい方だということを思って慰められることもあるのです。世の中の嫌なものを見るたびに、私たちに神の国を切実に願う思いが湧いてきます。私たちは今、災害やと疫病、不正と戦争を目の当たりにしています。けれども、そのことによってイエスがもう一度来られ、この世界を癒やし治めてくださることを切実に願うようになりました。世の闇は、私たちに神の国の光を求めさせるようにもなるのです。

イエスは言われました。「まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。」（7-8節）そして、その後で、こう言われました。「しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょう

か。」二千年前、イエスは救い主として世に来られましたが、二度目には、裁き主として世に来られます。そして、その時は近づいています。その日まで、正しく、真実な神に信頼して、あきらめずに、怠けずに、祈り続ける信仰者がいるだろうかといエスは私たちに問うておられるのです。真実な神に、私たちもの精一杯の真実をもって応答する、それが信仰です。私たちが、失望せずに祈り続けることができるのは、自分の信念が強いから、また、我慢強いからなどといった私たちの側の力によるものではありません。神が真実であるから、イエスによって神を父と呼んで、どんなことでも願うことを許されているからです。神が私たちの希望のみなもとです。

「失望せずに祈り続ける。」失望しない人は祈り続けます。祈り続ける人は失望しません。今朝、ひとりびとりが、この教えを実行する者となれるよう、主の助けを心から願いましょう。

(祈り)

父なる神さま、この世は私たちを失望させることで満ちています。私たちは物事がうまく進まないのを見てすぐに失望し、失望することがまるで第二の習性のようになってしまいました。しかし、聖書は「主に信頼する者は、失望させられることがない」と教えています。希望と慰めの神さま、あなたにあって希望を持つことを教え、祈ることを教えてください。私たちの栄光の望み、主イエス・キリストのお名前です。



Penguin Club
www.penguinclub.net